

# 守の家

伊藤左千夫

青空文庫



実際は自分が何歳の時の事であつたか、自分でそれを覚えて居たのではなかつた。自分が四つの年の暮であつたといふことは、後に母や姉から聞いての記憶であるらしい。

煤掃きも済み餅搗きも終えて、家の中も庭のまわりも広々と綺麗になつたのが、気も浮立つ程嬉しかった。

「もう三つ寝ると正月だよ、正月が来ると坊やは五つになるのよ、えいこつたらう……木っばのような餅たべて……油のような酒飲んで……」

姉は自分を喜ばせようとするような調子にそれを唄つて、少しかがみ腰に笑顔で自分の顔を見るのであつた。自分は訳もなく嬉しかった。姉は其頃何んでも二十二三であつた。まだ児供がなく自分を大へんに可愛がつてくれたのだ。自分が姉を見上げた時に姉は白地の手拭を姉さん冠りにして筒袖の裃天を着ていた。紫の半襟の間から白い胸が少し見えた。姉は色が大へん白かつた。自分が姉を見上げた時に、姉の後に襷を掛けた守りのお松が、草箒とごみとりとを両手に持ったまま、立つて姉の肩先から自分を見下して居た。自分は姉の可愛がつてくれるのも嬉しかったけれど、守りのお松もなつかしかつた。で姉の顔を見上げた目で直ぐお松の顔も見えた。お松は艶のよくない曇つたような白い顔で、

少し面長な、やさしい女であった。いつもかすかに笑う其目つきが忘れられなくなつた。お松もとると十六になるのだと姉が云つて聞かせた。お松は其時只かすかに笑つて自分のどこかを見るように口は聞かなかつた。

朝飯をたべて自分が近所へ遊びに出ようとすると、お松はあわてて後から付いてきて、下駄を出してくれ、足袋の紐ひもを結び直してくれ、緩んだへこ帯を締直してくれ、そうして自分がめんどうがつて出ようとすることを、猶なほ抑えて居つて鼻をかんでくれた。

お松は其時もあまり口はきかなかつた。自分はお松の手を離れて、庭先へ駈け出してから、一寸ちよつと振りかえつて見たら、お松は軒口に立つて自分を見送つてたらしかつた。其時自分は訳もなく寂しい気持のしたことを覚えて居る。

お昼に帰つて来た時にはお松は居なかつた。自分はお松は使にでも行つたことと思つて気にもしなかつた。日暮になつてもお松は居なかつた。毎晩のように竈かまどの前に藁わら把たばを敷いて自分を暖まらしてくれた、お松が居ないので、自分は始めてお松はどうしたのだろうかと思つた。姉がせわしなく台所の用をしながら、遠くから声を掛けてあやしてくれたけれど、いつものように嬉しくなかつた。

夕飯の時に母から「お前はもう大きくなつたからお松は今年きりで今日家へ帰つたのだ

よ、正月には年頭に早く来るからね」と云われて自分は平気な風に汁掛飯を音立てて搔込かきこんでいたそうである。

正月の何日頃であつたか、表の呉縁くれえんに朝日が暖くさして居る所で、自分が一人遊んで居ると、姉が雑巾がけに来て「坊やはねえやが居なくても姉さんが可愛がつてあげるからね」と云つたら「ねえやなんか居なくなつてえいや」と云つてたけれど、目には涙を溜ためてたそうである。

正月の十六日に朝早くお松が年頭に来た時に、自分の喜んだ様子つたら無かつたそうである。それは後に母や姉から幾度も聞かせられた。

「ねえやは、ようツたアなア、ようツたアなア。ねえやはいままでどいつてた……」

と繰返し云つて、袖にすがられた時に、無口なお松は自分を抱きしめて、暫しばらくは顔を上げ得なかつたそうである。それからお松は五ツにもなつた自分を一日おぶつて歩いて、何から何まで出来るだけの世話をすると、其頃もう随分ないたずら盛りな自分が、じいつとしてお松におぶされ、お松のするままになつていたそうである。

お松も家を出て来る時には、一晚泊るつもりで来たものの、来て見ての様子で見ると、此の上一晚泊つたら、愈別いよいよれにくくなると気づいて、おそくも帰ろうとしたのだが、自分

が少しもお松を離れないので、帰るしおが無かった。お松にはとても顔見合つて別れることは出来ないところから、自分の気づかない間に逃げようとしたのだが、其機会を得られずに泊つて終つた。自分は夕飯をお松の膝ひざに寄つてたべるのが嬉しかった事を覚えて居る。其夜は無論お松と一緒に寝た、お松が何か話をして聞かせた事を、其話は覚えて居ないが、面白かつた心持だけは未だいまに忘れない。お松は翌朝自分の眠つてる内に帰つたらしかった。其後自分は両親の寝話に「児供の余り大きくなるまで守りを置くのは良くない事だ」などと話してるのを聞いたように覚えてる。姉は頻しきりに自分にお松を忘れさせるようにいろいろ機嫌をとつたらしかった。母はそれから幾度か、ねえやの処ところへ一度つれてゆくつれてゆくと云つた。

自分が母につれられてお松が家の庭へ這入はいつた時には、梅の花が黒い湿つた土に散つていた。往来から苳かりぶき草のかぶつた屋根の低い家が裏まで見透かされるような家であつた。三時頃の薄い日影が庭半分にさして、梅の下には露ふきの臺とうが丈高くのびて白い花が見えた。庭はまだ片づいていてそんなに汚くなかつた。物置も何もなく、母家一軒の寂しい家であつた。庭半分程這入つて行くと、お松は母と二人で糸をかえして、自分達を認めると直ぐ「あれまア坊さんが」と云つて駆け降りて来た。お松の母も降りて来た。「良く

まア坊さんきてくれたねえ」と云つて母子して自分達を迎えた。自分は少しきまりが悪かった。母の袖の下へ隠れるようにしてお松の顔を見た。お松は襷をはずして母に改つた挨拶をしてから、なつかしい目でにつこり笑いながら「坊さんきまりがわるいの」と云つて自分を抱いてくれた。自分はお松はなつかしいけれど、まだ知らなかったお松の母が居るから直ぐにお松にあまえられなかった。母はお松の母と話をしている。お松の母は母を囲炉裏端へ連れて行つた。其内にお松は自分をおぶつて外へ出た。菓子屋で菓子を買つてくれた。赤い色や青い色のついでる飴あめの棒を両手に五本ずつ買つてくれた。お松は幾度も顔を振向けて背に居る自分に話をした。其度に自分の頬がお松の鬢びんの毛や頬へさわるのであった。お松はわざと我頬を自分の頬へ摺すりつけようとするらしかった。

お松が自分をおぶつて、囲炉裏端へ上つた時に母とお松の母は、生薑しょうがの赤漬と白砂糖で茶を飲んで居つた。お松は「今夜坊さんはねえやの処へ泊つてください」と頻りに云つてゐる。自分は點頭して得心の意を示した。母は自分の顔を見て危あやぶむ風で「おまえ泊れるかい夜半時分に泣出しちや困るよ」と笑つてゐる。お松は自分が何と云うかと思つてうらしく自分の顔色を見てる。

「泊れるでしょう」

お松はこう云つて熱心に自分に摺寄つた。お松の母も頻りに「こんな汚ない家だけれど決して寒い思ひはさせないから」と母に言つてる。母は自分の顔をのぞいて「泊れるかい」と云う。

「ねえやのそこへ泊れる」

自分がさういうと「さア極きまつた」と云つてお松は喜んだ。そうしてお松は自分の膝の上へ抱上げて終つた。

「おまえ泊れるかい」

母は猶念を押し「おまえが泊ると極ればお母さんは出かける、えいだつぺねい」と云つた。

「お母さんは行つてもえい」

自分がさういうと、母はいろいろ頼むと云う様な事を云つて立ちかける。する処へ赤い顔の背の高い五十許ばかりの爺が庭から、さげた手を振りつつ這入つて来た。何かよく解らなかつたけれど、今夜是非お松を頼みたいと云うような事を、勝手にしやべつて出て行つた。お松が家の本家のあるじだという事であつた。

「困つたなア困つたなア」



お松はくりかえしくりかえし云つて溜息ためいきをついた。結局よんどころないと云う事で、自分は母と一緒に掛けることになった。お松は「仕様がないねえ坊さん」と云つて涙ぐんだ。「又寄つてください」と云うのものはつきりとは云えなかつた。そうして自分を村境までおぶつて送つてくれた。自分も其時悲しかったことと、お松が寂しい顔をうなだれて、泣き泣き自分を村境まで送つてきた事が忘れられなかつた。

「さアここでえいからお松おまえ帰つてくれ」

と母が云つても、お松はなかなか自分を背から降ろさないで、どこまでもおぶつて来る。もうどうしてもここでとおもう処で、自分をおろしたお松は、もうこらえかねて「坊さんわたしがきつと逢いにゆくからね」と自分の肩へ顔をあてて泣いた。自分もお松へ取りついて泣いた。母は懐から何か出してお松にやった。お松は頻りに辞退したのを、母は無理にお松にやって、自分をおぶつた。お松はそれでも暫くそこに立っていたようであつた。それきり妙に行違つて、自分はお松に逢わなかつた。それでも色のさえない元氣のない面長なお松の顔は深く自分の頭に刻まれた。

七八年過ぎてから人の話に聞けば、お松は浜の船方の妻になつたが、夫が酒呑で乱暴で、お松はその為ために憂鬱性の狂いになつて間もなく死んだという事であつた。

(明治四十五年二月)

# 青空文庫情報

底本：「野菊の墓」新潮文庫、新潮社

1955（昭和30）年10月25日発行

1985（昭和60）年6月10日85刷改版

1993（平成5）年6月5日97刷

入力：大野晋

校正：高橋真也

1999年2月13日公開

2005年11月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 守の家

伊藤左千夫

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>